東洋美術大観 八

612

Toyo Bijutsu
Taikwan No. 8

東洋美術大観 八

750
T12f

東洋美術大觀第八冊

目次

支那畫

第一編　太古乃至五代

琵琶捍撥畫騎象皷樂圖	一枚
傳呉道玄筆釋迦及文殊、普賢圖三幅	四枚
傳同筆山水圖雙幅	二枚
傳王維筆瀑布圖	一枚
傳戴嵩筆風樹放牛圖	一枚
李眞筆不空金剛像（以上唐）	一枚
釋貫休筆十六羅漢圖（二幅）	二枚
傳同筆十六羅漢圖（二幅）	二枚
傳徐熙筆紅蓮鳧鷺圖雙幅（以上五代）	二枚

第二編　宋

石恪筆二祖調心圖雙幅	三枚
十六羅漢圖（二幅）	二枚
傳趙昌筆茉莉花圖	一枚
傳李龍眠筆睡布袋圖	一枚
傳同筆羅漢圖（二幅）	二枚
傳同筆維摩詰圖	一枚
傳趙大年筆秋汀行旅圖	一枚

傳同筆暮林群鴉圖　一枚
傳徽宗皇帝筆松溪風雨圖　一枚
傳同筆秋山吟眸、雪徑曳笻圖雙幅　三枚
龍門灣士筆米法山水圖　一枚
傳張思恭筆孔雀明王像　二枚
傳同筆不空金剛像　一枚
玄奘歸唐圖（以上北宋）　一枚
李迪筆雪中歸牧圖雙幅　二枚
同筆牧羊圖　一枚
同筆紅白木芙蓉圖雙幅　二枚
傳蘇漢臣筆羅漢煎茶圖　一枚
馬公顯筆藥山李翺禪會圖　一枚
傳馬遠筆林和靖愛梅圖　一枚
傳同筆秋江孤舟圖　一枚
馬遠筆風雨山水圖　一枚
同筆松下高士圖　一枚
同筆松下觀月圖　一枚
同筆寒江獨釣圖　一枚
傳同筆松下展望圖　一枚
傳同筆雪窓吟思圖　一枚
馬麟筆禪門機緣圖雙幅　二枚

傳同筆普賢菩薩圖　一枚
陸仲仁筆江亭談古圖　一枚
傳閻次平筆樹下牧牛圖　一枚
傳毛益筆萱草狗兒圖　一枚
林庭珪及周季常筆五百羅漢圖 三幅　三枚
香象大師像　一枚
傳劉松年筆宮女刺繡圖　一枚
夏珪筆風雨山水圖　一枚
同筆江頭泊舟圖　一枚
同筆山水亭榭圖　一枚
同筆觀瀑及聽泉圖雙幅　二枚
同筆江城圖　一枚
傳同筆水鷗圖　一枚
傳同筆山水圖雙幅　三枚

支那畫

第一編　太古乃至五代

禹域の美術、由りて來ること甚古し。中に就いて、繪畫の發展は、早くこれを文獻に徵すべし。その傳ふる所に依るに、黃帝の臣史皇始めて畫を造り、（雲笈七籤、文選註）虞の時に至りて五釆の繪あり。（尙書益稷）商に伊尹が九主の圖畫、（史記）湯王が良弼の夢象（尙書）あり。周に及びては文化益〻進み、冕服、旗旐の彩繪あり、（周禮）王門の畫虎、（同上）明堂の壁畫（孔子家語）あり。楚の先王の廟には、天地、山川、神靈及古聖賢等の行事を圖せりきと云ふ。（楚辭章句）三代の技術今にして觀るべきもの、僅に銅器の鑄文あるに過ぎず。未だ畫として深く論ずるに足らざるなり。春秋、戰國の世、繪事の諸書に散見せるもの少からず。宋の元君は畫人を召してその槃礴を喜び、（莊子外篇）周君の畫筴者は、三年にして龍蛇、禽獸、車馬、萬物の狀を畫き、（韓非子）魯の公輸班は忖留神の像を寫し、（水經註）齊の敬君は、王の爲に九重の臺に畫き、久しく歸ることを得ずして家を思ひ、その妻を畫きてこれに對せりと云ふ。（劉向說苑）韓非子に見えたる齊王の爲に畫きし客の、王の問に答へて、狗馬を畫くは難く、鬼魅を畫くは易しと言へるは、視て以て論畫の嚆矢と爲すに堪へたり。秦の始皇の時、騫霄國畫人烈裔を秦に獻ず。丹青を含みて地に潄けば、魑魅及詭怪群物の象を成し、指を以て地に畫けば、長さ百丈にして直なること繩墨の如く、方寸の內に四瀆、五岳、列國の圖を畫き、又龍鳳を畫きて睛を點ずれば、則ち皆飛び去ると傳ふ。（王子年拾遺記）騫霄は今その地理を詳にせずと雖も、想ふに或は西域の一國にして、その技術支那よりも進めるものあり、以て支那の繪畫を益せしならむか。始皇曾て海神と會せし時、左右の畫に巧なる者、脚を以てその狀を寫せりと云ふ（伏琛三齊略記）は、荒唐固より信ずるに足らずと雖も、亦以て畫事の一徵と爲すべし。

西漢に至りて、繪事の史書に徵すべきもの漸く多し。文帝は未央宮承明殿の壁に畫を作らしめ、（文苑英華）武帝は臺を甘泉宮に造り、その室に天地、太一及諸鬼神を畫かしめ、（漢書郊祀志）宣帝は單于の始めて入朝せし時、股肱の美を思ひて、これを麒麟閣に畫かしめ、その形貌を肖せて官爵氏名を署せしめ、（漢書蘇武傳、論衡）成帝は甲觀畫堂に生れ、（漢官典職）趙充國の像を甘泉宮に圖せしむ。（漢書趙充國傳）休屠王の閼氏も亦曾て甘泉宮に圖畫せられき。（漢書金日磾傳）その餘兵法圖、黃帝圖、風后圖、鬼容區圖、孫軫圖、王孫圖、魏公子圖、鵊治子圖、別成子望軍氣圖、伍子胥圖、苗子圖、耿昌月行帛圖、（漢書藝文志）鹵簿圖（玉海）及畫車（漢書郊祀志、輿服志、虎兒熊麋を畫く）等あり。又明光殿の省中には、粉壁に紫青の界を施して古烈士を畫き、（漢官曲職）廣川惠王の殿門には、古勇士成慶の像を畫き、（漢書景十三王傳）成都學の周公禮殿（獻帝時立）には、磐古の三皇五帝、三代の君臣及孔子七十弟子を壁間に畫き、（玉海）魯の靈光殿には天地品類、群生雜物、奇怪

神靈等を寫し、その狀を載せて丹青に託し、（王延壽魯靈光殿賦）民の門戸に神荼、鬱壘及雞を畫きて厭勝と爲せしこと（風俗通義、拾遺記）等あり。繪畫の技漸く進み、その用亦從ひて多きに至りしを見るべし。啻に然るのみならず、漢の宮廷には尙方の畫工ありきと見え、黃門の畫者は曾て霍光に賜はるべき周光負成王圖を作り、（漢書霍光傳）毛延壽、陳敞、劉白、龔寬、陽望、樊育等（西京雜記）は竝にその名を今に傳へたり。これを畫院の濫觴とす。

東漢の世、武帝が東平憲王に列仙圖を賜ひしことあり。（後漢書憲王傳）明帝頗る文雅を好み、別に畫官を立て、博洽の士に詔して經史の事を撰ばしめ、以てこれを畫かしめ、鴻都學を創立して、天下の奇藝を集む。この頃既に縑帛の圖畫あり。永平中、前世の功臣を追感して、二十八將を南宮の雲臺に圖せしむ。（歷代名畫記）又曾て使を月氏の國に遣し、佛教の經典及彫像と共に白氎の畫像等を將來せしめ、これを寫して數本を作り、南宮の清涼臺及高陽門顯節壽陵上に安置せしめ、又白馬寺の壁上に千乘萬騎遶塔三匝圖を作らしむ。（理惑論、弘明集、後漢書等）これ支那に佛教畫ある最初なり。順帝の皇后梁氏は、列女圖畫を左右に置きて、みづから監戒とし、（後漢書皇后記）靈帝の光和元年には、鴻都門學に孔子及七十二弟子の像を畫く。（同書蔡邕傳）その餘郡府聽事の壁畫、（同上郡國志註）兵雲圖、（益州耆舊傳）三禮圖、（隋書經籍志）飛軨畫（後漢書輿服志註）及名士、烈女等の畫像（後漢書各列傳）等あり。畫を能くせし人には張衡、蔡邕、趙岐、劉褒等、尙方の畫工には劉旦、楊魯等あり。（歷代名畫記等）而も東漢に至りては、畫蹟今に存じ、以て當時の技巧を觀ることを得。謂はゆる石刻畫これなり。今その尤なるもの二三を左に述ぶべし。

山東省肥城縣西南約七十里孝里舖に、孝堂山祠と稱する石室ありて、壁面に畫を刻せり。孝子郭巨のその母を葬りし所なりと傳稱すれど、蓋し後世の附會ならむ。建立の年時を明にせずと雖も、石上の題銘に、「平原濕陰邵善君、以二永建四年四月廿四日一、來二過此堂一、叩頭謝二賢明一」とあるに徵すれば、後漢順帝以前の物なること明なり。その畫は線畫を陰刻せるものにして、大王車、成王、貫胷國人、升鼎の故事及戰爭、庖厨、歌舞の俗等を圖せり。（挿圖參看）

孝堂山下より發掘せし小石祠（織田信吉發掘、東京帝國大學藏）の壁面にも亦刻畫あり。（挿圖參看）刻法前者と異なりて、武氏祠（後出）に同じく陽刻なり。製作の年代武氏祠と略同じからむ。

武氏祠は同省嘉祥縣の東南三十里紫雲山下武翟山小村落の北に在り。元石室三ありしが、今は乾隆中建つる所の一堂內に刻畫ある石を收めたり。その石闕の銘に依りて、これ等の刻畫の桓帝建和頃の製作なることを知る。刻畫石四十餘あり。圖する所、帝王、聖賢、名士、烈女、戰爭、升鼎、車馬、庖厨、龍魚、鬼神、奇禽、異獸、祥瑞等、變化極めて多し。以て古來漢代に至るまでの繪畫の命題、圖樣、技巧、風趣等を稽ふるに足れり。（挿圖參看）

これ等の外、漢代の碑闕及刻畫石、傳世尙少からず。隸釋、石索等載する所亦多し。中に就いて李翕澠池五瑞碑、不其令董君闕（展墓圖）等、畫圖最も巧なり。何れも人物よりは畫馬の殊に妙なるを見る。

三國の世、能畫の名を畫史に傳へたる者少からずと雖も、最も著れたるは、獨り吳の曹弗興あるのみ。孫權その畫く所の蠅を見て生蠅と爲

孝堂山祠石刻畫

孝堂山下祠石刻畫

武氏祠石刻畫

同上

し、手を擧げてこれを彈けりと云ひ、(張勃吳錄)謝赫はその龍首の畫を見て、名豈虛ならむやと評せし(畫品)に考ふれば、その技巧の妙想ひ見るべし。然れども畫蹟固より今に存ぜず。僅に曹衣出水の語(畫鑒)に依りて、その人物の描法に舞筆少く、後の謂はゆる蚯蚓描にや似たりけむと憶はるゝのみ。

繪畫を鑒賞することは、後漢明帝の頃に始まりて六朝に盛なり。明帝の時、天下の奇藝雲の如く集まりきと稱す。董卓の亂に當り、軍人皆圖畫縑帛を取りて、帷囊に收むるもの七十餘乘なりきと云へれば、その集藏の盛、察するに餘りあり。魏晉の世、藏蓄固より多かりしが、寇洛に入りて一時焚燒す。晉劉曜に遭ふて多く毀散せらる。桓玄性貪奇、天下の法書、名畫必己に歸せしむ。その簒逆に及びて、晉府の眞蹟盡くこれを得たり。劉牢之子敬宣を遣して降を請ふ。桓玄大いに喜び、書畫を陳ねて共にこれを觀きと云ふ。その耽嗜想ふべきなり。爾來宋齊梁陳の君、率ね雅尙あり。宋の高祖桓玄を破りし時、先臧喜をして宮に入りて所藏の書畫を取らしむ。南齊の高帝これを傳へ、年時の遠近を以てせず、但その技の優劣を以てして等差を附し、陸探微より范惟賢に至るまで、四十二人四十二等、二十七帙三百四十八卷と爲し、聽政の餘旦夕披玩す。梁の武帝尤も寶異を加へ、更にこれを搜集す。元帝素才藝あり。みづから丹靑を善くし、古畫の名品內府に充牣せり。侯景の亂に當り、太子綱數〻秦の始皇が天下の書を焚かむとするを夢みる。既にして內府の圖畫數百函、果して侯景の爲に焚かる。亂平ぐに及びて、有る所の畫皆載せて江陵に入りしに、西魏の將于謹の陷るゝ所と爲り、將に降らむとするに當り、乃ち名畫、法書及典籍二十四万卷を聚め、後閤の舍人高善寶をしてこれを焚かしめ、元帝みづから火に投じて共に焚けむとす。歎じて曰く、蕭世誠遂にこゝに至る。儒雅の道今夜窮すと。于謹等煨燼の中より書畫四千餘軸を收めて、長安に歸る。顏之推が觀我生賦に、「人民百萬而囚虜、書史千兩而煙颺、史籍巳來、未之有也、溥天之下、斯文盡喪」と曰へるは、即これなり。陳の天嘉中、文帝肆意搜求し、得る所少からず。隋の陳を平ぐるに及び、元帥に命じてこれを收めしめ、八百餘卷を得たり。隋の文帝東京觀文殿後に於いて二臺を起し、東を妙楷と云ひて、古よりの法書を藏し、西を寶蹟と名づけて名畫を收む。煬帝の東楊州に幸するや、盡くこれを齎らして駕に從はしめしが、途にして船覆りて大半を淪棄す。煬帝崩じて宇文化に歸し、更に竇建德及王世克の取る所と爲り、後共に唐朝の有と爲りぬ。(歷代名畫記)裴孝源の貞觀公私畫史錄する所の古畫、多くは梁朝又は隋朝の官本にして、間〻晉宋梁陳の題記ありなど云へるもの、即皆これなり。かくの如く鑒賞の盛なるに加ふるに、佛教漸く隆興し、その圖像の藍本は次第に西域より傳來し、道教亦これに倣ひて宗教の形式を取り、寺觀の建立に伴ひて、壁畫盛に行はれしかば、六朝の間、繪畫の技術頓に發達しぬ。されば論畫もこれに從ひて興り、晉に顧愷之の論畫(名畫記)あり。南齊に謝赫の畫品出でゝ、六法の目始めて備はり、批評亦その精微に入り、梁に元帝の山水松石格(畫苑補益)ありて、始めて畫山水の法を說き、陳に姚最の續畫品ありて、繪畫の用を論じ、評判別に一見地を立つ。こゝを以て、名手のこの間に輩出せる者亦少からず。晉に衞協、張墨、荀勗、顧愷之、史道碩、范宣、戴逵等あり。畫品衞協を評して、「古畫皆略、至協始精」と言ひ、顧愷之は三絕

の名高く、深く謝安に器重せられ、蒼生ありて以來、未これあらずと稱せられ、戴逵は彫像の妙に兼ねて、佛教畫の名手として著れき。宋に陸探微、王微、顧寶光、袁倩、齊に章繼伯、蘧道愍、梁に張僧繇、北齊に曹仲達、楊子華、隋に展子虔、鄭法士及于闐の人尉遲跋質那等あり。中に就いて、顧陸張を六朝の三大家とす。曹仲達は淨土畫に著れ、尉遲跋質那は西域の畫法を傳へつ。唯憾む、これ等諸家の畫蹟、今にして觀るに由く、風格の變遷を詳論し、技術の巧拙を細評すること能はざるを。然れども、その前出の漢代石刻畫より進めること數等にして、而も後出の唐畫よりは較ゝ稚なりけむこと、これを察するに難からざるなり。

唐に至りて文物の隆運遙に前古に過ぎ、繪畫も亦發展の鴻溝を畫せり。その鑒賞の如きも、六朝より盛なること致しぬ。梁隋の官本、兩都秘藏の珍蹟は、宋遵貴これを載せて河を泝り、漂沒十の一二を亡へりと雖も、餘は皆太祖の御府に歸し、太宗更に天下に求購せり。（名畫記）貞觀公私畫史錄する所の名畫二百九十三卷あり。天后の世、張易之奏してこれを修し、名工を鳩めて副本を摸製し、みづから多く眞本を藏す。祿山の亂、耗散少からず。肅宗亦これを保持せずして、往々貴戚に頒ち、轉じて好事の有に歸し、德宗艱難の後、更に散迭を經て、鑒藏漸く人間に行はる。憲宗の時、宸翰を降して張氏の珍を索め、顧陸以下國朝名手の畫三十卷を上らしむ。張彥遠の頃、董伯仁、展子虔、鄭法士、楊子華、孫尙子、閻立本、吳道玄等の屛風一扇の値、二万乃至一万五千金、楊契丹、田僧亮、鄭法輪、尉質乙僧、閻立德等の畫一万金に値せりき（名畫記）と云へれば、當時名畫の寶重せられしさまも想ひ見つべし。李嗣眞が畫後品、僧彥悰が後畫錄、張彥遠が歷代名畫記、朱景玄が名畫錄等の著あるも、亦偶然に非ず。加ふるに、佛道二教隆興して、寺觀の建築に壁畫を需要すること益ゝ多かりしは、善導大師が淨土變三百餘壁を造り、中宗が佛寺の壁に道相を畫き道觀に佛教の事を畫くを禁ぜしにても、これを徵するに餘りあるのみならず、嶝畫の佛像亦行はれき。玄奘三藏及王玄策の徒宋法智等の印度より將來せりし佛教畫は、乙僧が父跋質那に禀けて鼓吹したる西域の凹凸畫法と共に、支那の繪畫を益したること少からざりしなるべく、又明皇開元の頃には、善無畏、金剛智等、新に祕密宗を傳へて、印度婆羅門教の法式を輸入し、像容圖法をして豐富多趣ならしめき。こゝを以て、名手踵を接して出で、風格時に從ひて變じ、李唐一代の丹青、美を前代に肆にせり。人物畫に在りては、吳道子の大手腕、古今の畫聖と稱せられ、謂はゆる吳帶當風の描法は、古來の高古游絲の細筆を一變し、淡彩の法は謂はゆる吳裝の新格を出し、縱橫壯拔の技、一世を風靡せり。盧稜伽、李生、張藏、翟琰、王耐兒の徒、並にその法を傳ふ。山水畫の發達は、人物畫の背景よりして次第に獨立するに至ること、世界各國その例を同うし、支那に在りては、六朝の中頃より起りけむこと、梁の元帝の論畫、山水に關するものあるに徵すべしと雖も、その大いに觀るべきに至れるは、蓋し盛唐の二李を初めとす。思訓、昭道父子禀受して以て後に及び、細勁の皴法、靑綠、金碧の賦彩、格調こゝに成れるものゝ如し。後世明人これを仰いで北宗の祖とす。中唐に至りて王摩詰出で、水墨の山水始めて興り、山水訣、山水訓を著して、山水の論畫頗る精しきことを致せり。明人亦これを立てゝ南宗の祖と稱す。韋偃、王墨の徒相傳へて、以て五代の荆關に至る。この餘張孝師、何長

壽等の佛教畫、曹覇、韓幹、孔檠、陳閎等の鞍馬、戴嵩の牛、畢宏、張璪の松、邊鸞、陳庶、白旻等の花鳥、李漸の虎、李約の梅、蕭悅の竹等、皆一時に名あり。斯道の盛なること、亦以て見つべきなり。

五代の畫史中顯著なるは、梁の荊浩、關同ありて、山水に右亟の流を汲み、南唐に徐熙ありて花竹草蟲に秀で、前蜀に僧貫休ありて、始めて十六羅漢を畫きしこと等あるに過ぎず。

我が日東傳世の古畫、唐及五代の作と稱するもの、往々にしてこれあり。左にこれを掲げて、一々評說を附す。

琵琶捍撥畫騎象皷樂圖

正倉院御物

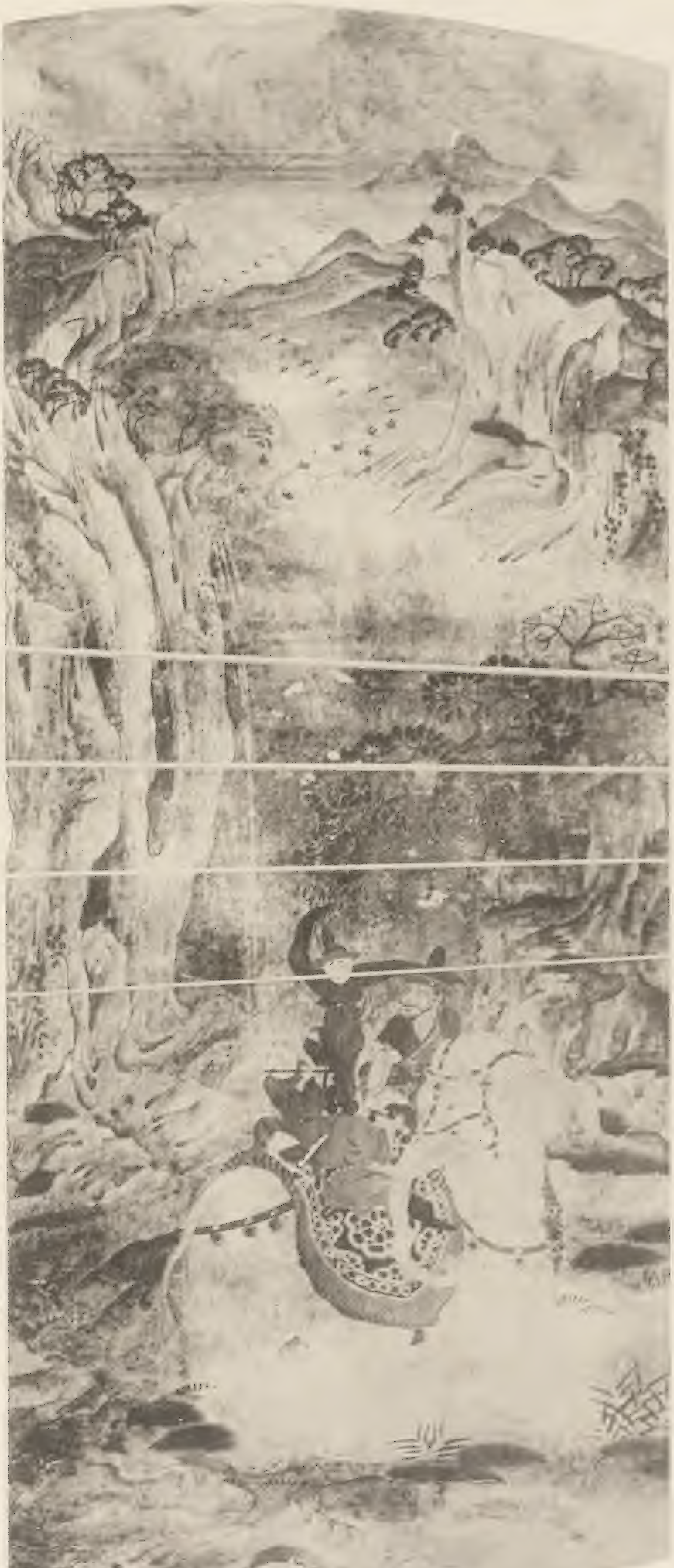
獸皮著色、縱一尺三寸四分、橫五寸五分

我が聖武天皇(在位唐開元十二年乃至天寶七年)の御遺物乃至東大寺盧舍那佛開眼供養會(唐天寶十一年)及同天皇崩後御一周忌法會(唐至德二年)に用ゐし器財、並に當時の文書等を納めたる奈良正倉院所藏の寶物に、唐製とおぼしき琵琶の捍撥の畫、観るべきもの數面あり。こゝに掲ぐるは即その一なり。この琵琶は楓材を蘇芳染にし、螺鈿を以て裝飾し、捍撥に獸皮を張りて濃彩の畫を圖せり。盛唐頃の繪畫として疑なかるべきもの、世恐らくはこの外あらじ。圖は蓋し西域の風俗にして、工匠の手に成れるものなるべしと雖も、唐代の古調藹然として掬するに足る。

琵琶捍撥畫騎象鼓樂圖　　正倉院御物

獸皮著色、縱一尺三寸四分、橫五寸五分

我が聖武天皇（在位唐開元十二年乃至天寶七年）の御遺物乃至東大寺盧舍那佛開眼供養會（唐天寶十一年）及同天皇崩後御一周忌法會（唐至德二年）に用ゐし器具、並に當時の文書等を納めたる奈良正倉院所藏の寶物に、唐製とおぼしき琵琶の捍撥の畫、觀るべきものの數面あり。こゝに揭ぐるは即ちその一なり。この琵琶は楓材を蘇芳染にし、螺鈿を以て裝飾し、捍撥に獸皮を張りて濃彩の畫を圖せり。盛唐頃の繪畫として疑なかるべきもの、世恐らくはこの外にあらじ。圖は蓋し西域の風俗にして、工匠の手に成れるものなるべしと雖も、唐代の古調盡無くして稱するに足る。



傳呉道玄筆釋迦、文殊、普賢圖三幅對

絹本著色、釋迦圖縱四尺七寸五分、横二尺四寸三分、文殊、普賢圖各縱四尺六寸五分、横二尺

京都　東福寺藏

傳同筆山水圖雙幅

絹本水墨、各縱三尺二寸三分横一尺四寸四分

京都　高桐院藏

この畫傳へて唐の呉道玄の筆と稱す。道玄、字は道子。或は曰ふ。道子は初名にして、後玄宗皇帝名を賜ひて道玄と改むと。少にして孤貧、天性畫を好み、未だ弱冠ならずして丹青の妙を極む。玄宗その名を聞き、召して禁中に入れ、供奉の畫工と爲し、內敎博士を授く。その畫系は梁の大家張僧繇より出でゝ、最も人物畫に長じ、盛に佛寺、道觀、廟殿等の壁畫を作る。景雲寺の壁に畫ける地獄變の如きは、京師の屠沽漁罟の輩見て罪を懼れ、その業を改むる者少からざりきと云ふ。以てその畫の世に推重せられ、從ひて感化力の偉大なりしことを知るべし。天寶中、玄宗蜀道の景致を回想し、李思訓と呉道子とに命じて、これを圖せしめしに、思訓は累月にして漸く成り、道子は嘉陵江三百餘里の山水、一日にして畫き畢れりと云ふ。手腕の健拔縱横なりしこと知るべきなり。この畫果してその眞蹟なることを證すべからずと雖も、古來の寺傳必しも謂はれなきに非ず。縱令道子の眞蹟に非ずとするも、これに匹敵すべき大家の作なるを知るべし。但文殊、普賢の二圖は、中幅の釋迦圖と畫趣の稍同じからざるものあり。圓光の畫法も中幅は暈染、左右二幅は線畫にして、衣褶の描法亦聊異なる所あり。或は年代及作者を異にするものならむも知るべからず。山水圖も亦必しも道子の筆と斷定すること難しと雖も、復俄に否定すべからず。その石皴、樹法頗る古意あり。況や、古傳必由る所あるべきをや。或は說を爲して、この二品を以て共に宋代の作とする者ありと雖も、明證のこれを徵するに足るものなきを奈何にせむ。

傳王維筆瀑布圖

京都　智積院藏

絹本水墨、但點苔に青綠を施せり、縱二尺一寸二分、橫三尺四寸

この圖古來傳へて唐の王維の畫と稱す。王維、字は摩詰、太原祁の人なり。曾て張九齡の爲に擢でられて右拾遺と爲り、玄宗天寶の末年、給事中に任せらる。安祿山の叛くや、摩詰强ひて僞官を授けられしが、亂平ぎて後、太子中允に下遷せられ、後尙書右丞に進む。肅宗の上元中卒す。年六十一。摩詰文學に長け、兼ねて佛理に通じ、深く維摩詰居士を追尙して、みづから名を維、字を摩詰と稱せるなりと云ふ。又草隸を善くし、畫を巧みにし、殊に山水に長じ、好みて平遠の景致を寫し、時に破墨を弄ぶ。その著山水訣及山水論あり。後世畫を論ずる者、多くは皆これを祖述す。その遺作として我が國に傳來せるもの、本圖の外なきを以て、比較對鑒に由なしと雖も、皴法頗る前出の山水圖に似て、多く見る所の宋畫よりは較〻古調あり。學者或は異說なきに非ずと雖も、蓋し亦宋以上の畫蹟ならむ。

戴嵩筆風樹放牛圖

伯林 人類學博物館藏

絹本淡彩、縱七寸九分、横八寸四分

戴嵩は何許の人なるを知らず。韓晉公滉の浙西に鎭せし時、命せられて巡官たり。仍りて滉を師として畫を學ぶ。滉に及ばずと雖も、獨り畫牛に長じ、その巧遠く滉に過ぎたり。山澤水牛の狀、その野性と筋骨との妙を極む。牛と牧童とを畫きては、眼睛の中互にその影の映せるを寫し、赴水飮流を畫きては、牛の唇鼻浮影の相連れるを寫せりと云ふ。實に唐朝畫牛の第一名手なり。本圖款識ありと雖も、唐畫の款識他にその例を見ざれば、或は摸本かも知れねど、以て戴嵩の技風を考ふべきものならむ。「延之心賞」及「壽口」の印は、後人の所藏印なり。

李眞筆不空金剛像

絹本着色、縦七尺、横四尺九寸八分

京都　敎王護國寺藏

我が國眞言宗の開祖弘法大師空海、延暦二十三年唐貞元二十年入唐して、密法を長安青龍寺の惠果阿闍梨に受け、留學三年、將に歸朝せむとするや、惠果即その供奉の畫工李眞等をして、兩界曼茶羅十舖等を圖繪せしめ、以てこれを空海に付す。こゝに揭ぐる所は即その一なり。龍猛、龍智、金剛智、善無畏、一行、惠果の像と共に、眞言七祖の畫像とて、東寺の寶物中、古來最有名なるものとす。その中龍猛、龍智は弘法大師の筆に係り、李眞の描けるものは爾餘の五幅なること、大師の著性靈集の文に明なり。李眞は唐の德宗の時の人にて、貞元中招福寺の庫院に鬼子母を畫き、團塔院にも花鳥の圖を遺せしこと、京洛寺塔記に見えたり。山城の神護寺に傳ふる兩界曼茶羅も亦李眞の筆にて、弘法大師の共に將來せるものなりと傳ふれど、これを考證するに、後年の摸作なり。然れども、亦以て密敎圖像に於ける中唐の畫風を觀るに足る。吳道子風の壯筆を外にしては、隋唐の人物畫、多くは皆この種の風に屬せしものなるべし。肥瘦を弄せざる細謹の描法は、縝密なる賦彩と共に、高古典雅言ふべからざるものあり。眞に千古の名品にして、寶中の至寶と稱すべしとす。

僧貫休筆十六羅漢像

男爵高橋是清君藏

今款記ある囉怙羅、伐那婆斯二尊者圖を出す、絹本著色、各縦三尺三分、横一尺四寸九分

傳同筆十八羅漢像

京都　高臺寺藏

今伐闍羅弗多羅、注茶半託迦二尊者圖を出す、絹本著色、各縦四尺二寸六分、横二尺一寸七分

釋貫休、字は德隱、婺州金溪の人なり。幼にして出家し、幾もなくして詩名世に高し。唐末天復中蜀に入る。王衍將に僭僞を圖らんとして四方の賢士を邀ふ。偶〻師を得て喜びて禮遇し、紫衣並に禪月大師の號を賜ふ。草書及圖畫を善くし、好みて羅漢を書く。後梁乾化二年成都に寂す。年八十一。その遺作錢塘の聖因寺に在りしもの、乾隆の時、寺主明水摸刻して、石本今に存せり。これと全く圖樣を同うせるもの、古く傳へて我が國に在り。正和中（元仁宗皇慶元年乃至延祐三年）北條實時が金澤文庫に收めしものにて、即こゝに掲ぐる高橋男爵所藏の幅なり。聖因寺本は後人二幅を添補して十八羅漢と爲し、而も元の十六羅漢中の二幅逸せしを、乾隆帝强ひて十六羅漢と爲し、新に尊名を欽定せられしものなること、これを高橋本に對較し、又その阿必達、嘎納嘎巴薩二尊者圖の書風異なるに徵すべし。又聖因寺本の拔嘎沽拉尊者圖も高橋本と異なりて、書風他の十三幅に同じからず。寧ろ高橋本の諾矩羅尊者圖の疑なきに如かず。殊に囉怙羅尊者圖の款記、聖因寺本は「信州懷玉山十六羅漢、廣明初、於㆓登高㆒、和安送㆓十身㆒、西岳僧貫休作、以㆓乾寧初冬孟廿參日㆒、於㆓江陵㆒、更續㆓前十本㆒、相去已十六年也、昔景昭禪人自㆑北來、見㆑請、當年將㆑歸㆓懷玉㆒」とあるに、高橋本は「西岳僧貫休作」の文字その末に在り。又伐那婆斯尊者圖にも、高橋本は「西岳僧貫休作」の記ありて、聖因寺本にはなし。これ等の事を綜合してこれを考ふるに、高橋本の聖因寺本に勝るや論なく、且聖因寺は原本既に逸して、明水の石刻あるのみなれば、禪月大師の蹟は、今にして獨り高橋本あるのみと云ふべきなり。

高臺寺の十八羅漢（今その二幅を逸す）は、我が京都の泉涌寺僧俊芿が、宋の開化寺の正大師より得て、建曆元年（寧宗嘉定四年）宋より將來せるものなり。當時明州某寺の僧これを見て、これ唐の禪月大師の筆なり、第二の摸本現に育王山に珍藏せり、子のこの眞蹟を得たるは、洵に海東の幸なりと言ひしと云ふ。然れども、これを前の高橋本の十六羅漢に較ぶるに、書風全く同じからず。或は別人の作なるべし。されど、これを後出宋朝の羅漢圖に比するに、古怪の書趣、到底同代の作とは見えず。蓋し亦貫休頃の製作ならむ。

傳徐熙筆紅蓮鳧鷺圖雙幅

京都　知恩院藏

絹本著色、各縱四尺三分、横二尺四寸四分

傳同筆柳鷺圖

伯爵柳澤保惠君藏

絹本著色、縱二尺九寸七分、横一尺四寸

徐熙は南唐鍾陵の人なり。世々江南の名族たり。花卉草蟲を書き、寫生を以て古人の法外に出で、設色甚生意ありと稱せらる。宋の太宗嘗てその畫を觀て、嘆賞して曰く。花果の妙、吾獨り熙あるを知る。その餘は觀るに足らざるなりと。仍りて徧く畫臣に示して、以て標準と爲さしめきと云ふ。宜なる哉。その孫崇嗣に至りて、沒骨法の祖と仰がれ、末流趙昌、易元吉等の名手を出せり。我が國傳ふる所、徐熙の畫と稱する花鳥畫頗る多しと雖も、こゝに揭ぐる二品の如きは、即その尤なり。蓮鳧圖の上部左方に「毘陵徐氏」の印あり。未その考證を得ず。圖中の水草、早く旣に沒骨法を交へ用ゐたるを見れば、崇嗣の法、或は熙の創意に出で、崇嗣に至りてこれを大成したるものか。

趙宋の世、繪事の盛なるこご唐に過ぎたり。寓意篇（明都穆）に曰く。「宋畫苑人、皆極天下之選、而朝廷復優遇之、故其藝精絶、非後世所及」こ。げに支那歷朝の中、帝室の繪畫を奬勵し、畫人を優待せるここ、宋朝に及ぶ時なく、太祖、太宗の頃よりして、天下の名手を翰林圖畫院に集め、祿を給して或は金帶を賜ひ、才に從ひて各〻待詔、祗侯、藝學、畫學正、學生等の階級を授け、常に畫を紈扇等に作りて進獻せしめ、その尤を撰びて殿廷、寺觀等に畫かしむ。仁宗はみづから丹青を善くし、神宗、哲宗の朝、畫院益〻盛に、徽宗の朝に至りて、殆どその極に達す。神宗元豐の頃、景靈宮を修し、徽宗宣和の頃、五岳觀、寶眞宮を建てし時の如きは、啻に畫院の畫人のみならず、徧く天下の名工を徵し、妙手を拔いて毫を障壁に揮はしむ。徽宗政和中、畫學を建設し、太學の法を用ゐて、四方の畫人を補試す。その試法は古人の詩句を以て題を命じ、畫を作らしむるに在り。（螢雪叢說）徽宗深く畫を好み、亦みづからこれを善くし、曾て宣和畫譜を輯せしめき。惜い哉、藝術に篤くして經世に明ならず。朝臣の朋黨牆に鬩ぎて外侮を禦ぐに由なく、兩帝金に執はれて汴京陷る。然れども、江南偏安の後に至りてさへ、紹興、淳熙の際、名手頻りに輩出し、南宋の畫院粲こして美を古今に肆にせり。古畫賞鑒も亦極めて盛なりき。宣和畫譜及中興館閣續錄載する所に見るも、御府收藏の富眞に驚くべく、鄧椿の畫繼、周密の雲煙過眼錄等に考ふるも、士人鑒藏の盛を察するに堪へたり。

かゝる盛運に膺りて、天才踵を接し、畫風次第に變遷するは、蓋し自然の數なり。國初太祖、太宗の世は、尙唐朝の餘勢を持して、寺觀の障壁、宗敎畫等最も盛に、待詔高益、高文進、高懷節、祗侯王靄、王道眞、厲昭慶、楊斐、藝學趙元良、學生趙光輔、院外の畫家王瓘、孫夢卿、侯翼、童仁益等、皆道釋に長じて專ら壁畫を作り、以て眞宗、仁宗兩朝に於ける祗侯高元亨、馮淸、陳用志等に至る。爾後この種の妙手漸く稀なり。蓋し佛敎畫は、前代の顯密諸宗頓に衰へ、禪宗の獨り盛なるに伴ひ、五代より流行し始めたる羅漢圖及禪僧の頂相等專ら行はれ、禮拜に供する諸尊圖像漸く廢れて、玩賞繪畫たる道釋人物これに代れるなり。これ實に宗敎畫史上の一大沿革こす。繪畫玩賞の形式亦從ひて一變し、古來の如く屛障、壁畫及橫卷の作に限らず。禮拜圖像の外、玩賞繪畫の挂幅あるも、これよりの事ならむ。從ひて山水、花鳥の大いに流行發達せるも、亦宋代に於いて始めてこれを見つこ謂ふべし。されば、郭若虛は曰へらく。「近代方古、多不及而過亦有之、若論佛道人物、士女牛馬、則近不及古、若論山水林石、花竹禽魚、則古不及近」。（圖畫見聞志）眞に知言なり。

人物畫は古風の佛敎畫衰へたりこ雖も、尙間〻後出の孔雀明王像、玄奘三藏圖、香象大師圖等の如きものあり。羅漢圖は殆ご宋畫道釋の本領とも稱すべきものにて、我が國に傳存せるもの頗る多し。中に就いて李龍眠最も妙手こ推さる。支那の畫傳に名を逸したる張思恭は、纖麗の畫風別に一家の妙あり。林庭珪、周季常も亦精巧の畫蹟を日東に存ず。禪僧の頂相は、その一例を後出の無準禪師像に見るべし。南宋の

梁楷に至り、減筆の一法新にその格を開けり。（畫蹟并に後に出づ）

山水は國初に李成、范寛、董源、巨然の四大家あり。次いで眞宗の朝に高克明あり、仁宗の頃に郭熈あり、哲宗の頃に趙大年あり、徽宗の頃に米元章、米元暉あり。各〻一家の風を立てゝ、後人の標範たり。中に就いて、李成が墨を惜むこと金の如く、直擦の皴法、好みて平遠寒林を寫し、殊に遠近透視の法を悟りて、山上の亭館飛簷を仰畫し、范寛が巃々たる山頂に密林を作り、水際に突兀たる落石を出し、董源が秋嵐遠景を巧にして多く江南の眞景を寫し、二米が新に一種の點法を創めしが如きは、特徴の最も顯著なるものなり。末流能手亦少からず。明人はこれを指して、その謂はゆる南宗の系統に屬すと云ふと雖も、明清の南宗畫に較ぶれば、格調甚古くして、必しも南北を以て別つべからず。殊に董源の如きは、王李の二法を兼ねき。南宋に至りて、趙伯駒、李唐、閻次平、劉松年、馬遠、夏珪等畫院に輩出し、山水の風爲に一變して、謂はゆる院體成り、趙、李、劉の三家は精巧の青緑を以てし、馬夏の二家は勁拔の筆墨を以てして、各〻一家の妙を極めき。

花鳥は國初に待詔黃居寀あり、院外に徐崇嗣あり。前者は勾勒塡彩の畫法に、莊麗富貴の趣を專にし、後者は沒骨寫生の創格に、輕淡野逸の致を擅にす。即ち黃氏體、徐氏體の祖なり。その後黃氏體は、神宗の朝に藝學崔白等あり。徐氏體は眞宗の朝に趙昌、哲宗の朝に易元吉等あり。末流能手亦各〻少からず。この中、黃氏體は即ち花鳥に於ける院體なり。徐氏體はその法沒骨と稱すれども、我が國に傳存せる趙昌及元の錢舜擧等の蹟（後に出づ）を觀るに、骨法の描線全く無きに非ずして、黃氏體の遺作（亦後に出づ）に比すれば、勾勒の甚細く、僅に草苔の類に線畫なきに過ぎず。仍りて惟ふに、宋元の沒骨は、全く勾勒なきこと近古清朝惲南田等常州派の花鳥の如きものに非ずして、細勾の描線傳彩の爲に負け、而もその設色に多く石具等を用ゐず、好みて水彩の輕淡を用ゐしものならむ。明代に至りて勾花點葉體剏まり、清朝に至りて純沒骨法の常州派起れるは、亦以て宋元の徐氏體に全然無勾勒の畫法あらざりしことを徵するに足らずや。

雜畫及文士、禪僧の墨戲亦頗る盛なりき。國初待詔董羽の龍魚、哲宗の朝蘇東坡、文與可の竹、僧仲仁等の梅、南宋に入りて楊補之の梅、陳所翁の龍、畫院副使李迪、待詔毛益の動植及牧谿、玉磵、羅窓等の墨戲を最も著れたるものとす。李迪、夏珪等の作、紈扇、方幀等の小品殊に多きは、亦これ南宋の一流行にして、これを現存の遺蹟に徵すべきなり。

宋代の論畫、見るべきもの亦少からず。立言の最多きは郭熈、郭若虛の二家にして、蘇東坡、李成、韓拙等これに次ぐ。郭熈には山水訓及畫訣あり。三遠（高遠、深遠、平遠）の別等をその創見とす。郭若虛の圖畫見聞志は、唐の張彥遠の歷代名代記に次いで、斯道の變遷を徵するに足る。その論畫の創見とも稱すべきは、用筆の三病（板、刻、結）等あり。東坡傳神の論亦取るべく、李成の山上の亭館飛簷を仰畫ずべしとの說は、今日の透視畫法に符合して、その卓見歎服すべし。惜い哉、沈括のこれに反せる以大觀小の見、多く後世に行はれて、支那の山水畫、今に至るまで透視畫法に合はざるもの多きに至りぬ。宣和畫譜の畫題の分科及饒自然の十二忌の如きは、その見頗る徽に入れり。然れども後者は、山水畫をして地文の實

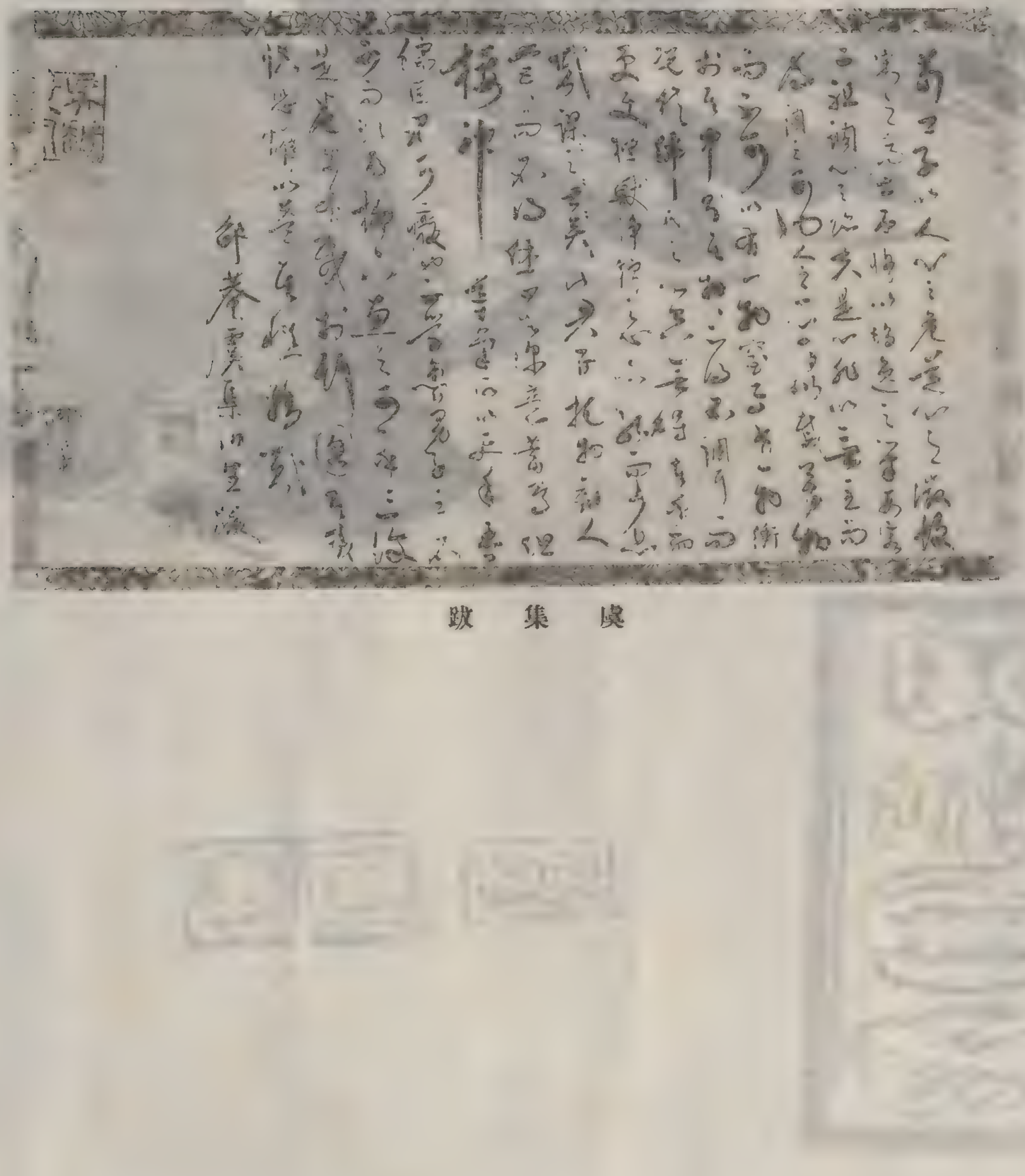
に拘泥せしむる弊なきに非ずと謂ふべし。餘は今詳説を略す。

宋畫の我が國に現存するものは、佛教畫の外、多くは應永乃至文明の際（明成祖乃至憲宗）に舶載せるものにして、而も最も南宋院體の畫に富めり。蓋し多く支那の南部に存じて、輸致に便なるのみならず、明代の風尙專ら南宗畫を好みて、院體の畫を貴ばざりしが爲ならむ。今に存ずるは蓋しその十の一にして、當時更に饒富なりけむことは、君臺觀左右帳記及稍後なる玩貨名物記等にて知らる。左にその尤品を列擧すべし。

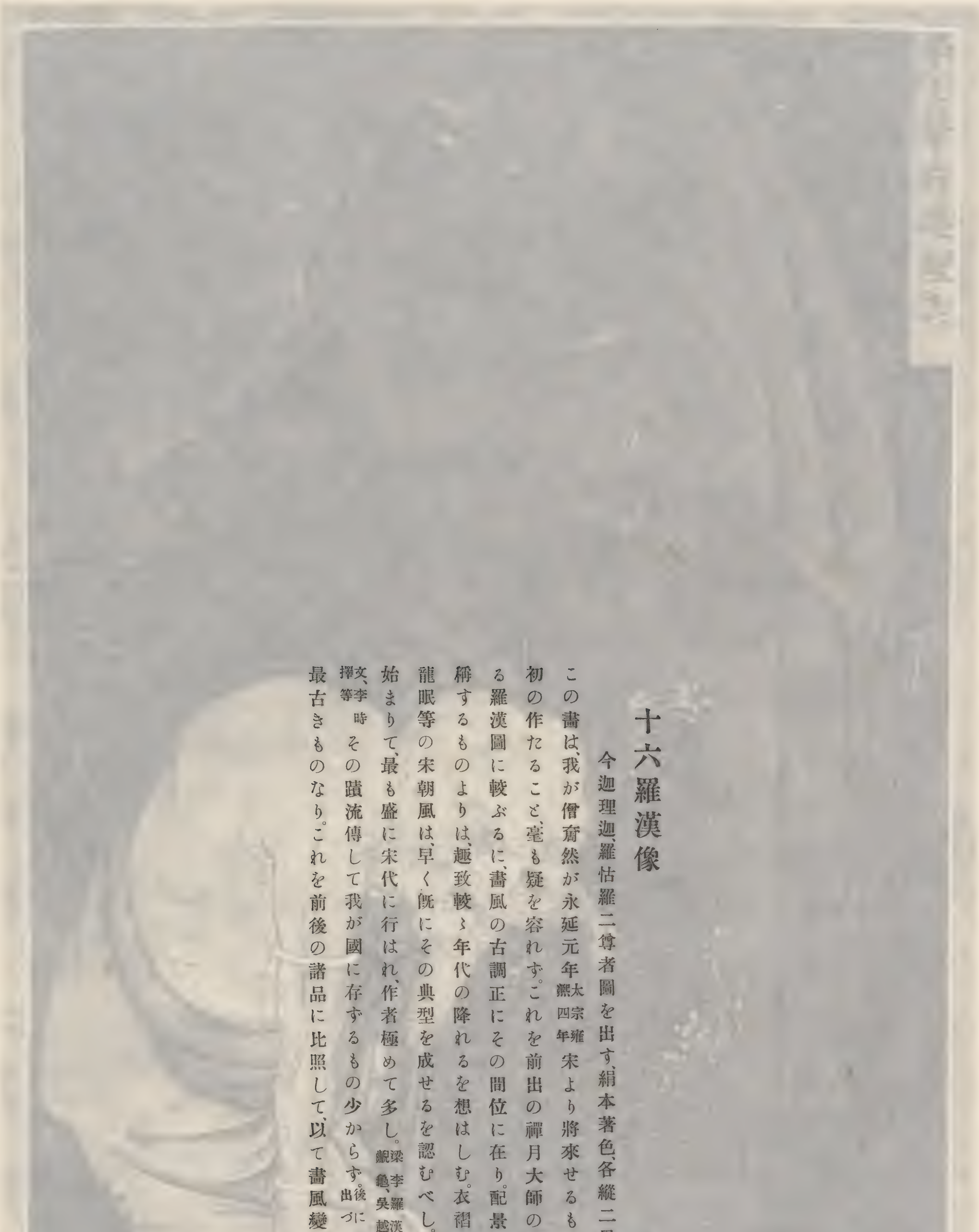
石恪筆二祖調心圖雙幅

紙本水墨、各縱一尺一寸七分、横二尺一寸二分　山城國　正法寺藏

石恪、字は子專、蜀の人なり。初め張南本に倣ひ、道釋人物を專にせり。後その畫縱逸、規矩に拘せず。往々奇矯怪譎の筆を弄びき。宋の太祖天下を統一するや、恪を招きて相國寺の壁に畫かしめ、授くるに畫院待詔を以てせしかど、辭して故山に歸れり。人と爲り口辯ありて、滑稽世を玩び、豪貴の畫を求むる者ある時、少しく意に滿たざれば、必譏諷の意を畫中に寓せりきと云ふ。こゝに揭ぐる所の圖は、乾德二年の作にして、宋朝の官本たりきと見え、「受命于天、既壽永昌」(古玉圖譜に據るに元符元年咸陽にて得たる秦璽なり)「政和」、「宣和」、「建業文局之印」、「德壽殿寶」「祕府」、「紹興」、「天水」(畫史會要曰、「徽宗(中署)畫後押字、用天水及宣和、政和小璽、或用瓢印蟲魚篆文」)の諸印及「損齋寶玩」の記あり。又元の儒者虞集(字伯生、號道園、至元八年歿、七十七歲、道園學古錄(五十卷)の著あり)の跋文ありて、これに附傳せり。元共に一横卷を爲せしを、舶載の後、挂軸に改裝せしなり。跋文中稱して端逸の筆と云ふ。明の都穆の寓意編に曰く、「石恪畫戲筆人物惟面部手足用畫法、衣紋麤筆成之」と。本圖善くこれに合へり。



虞集跋



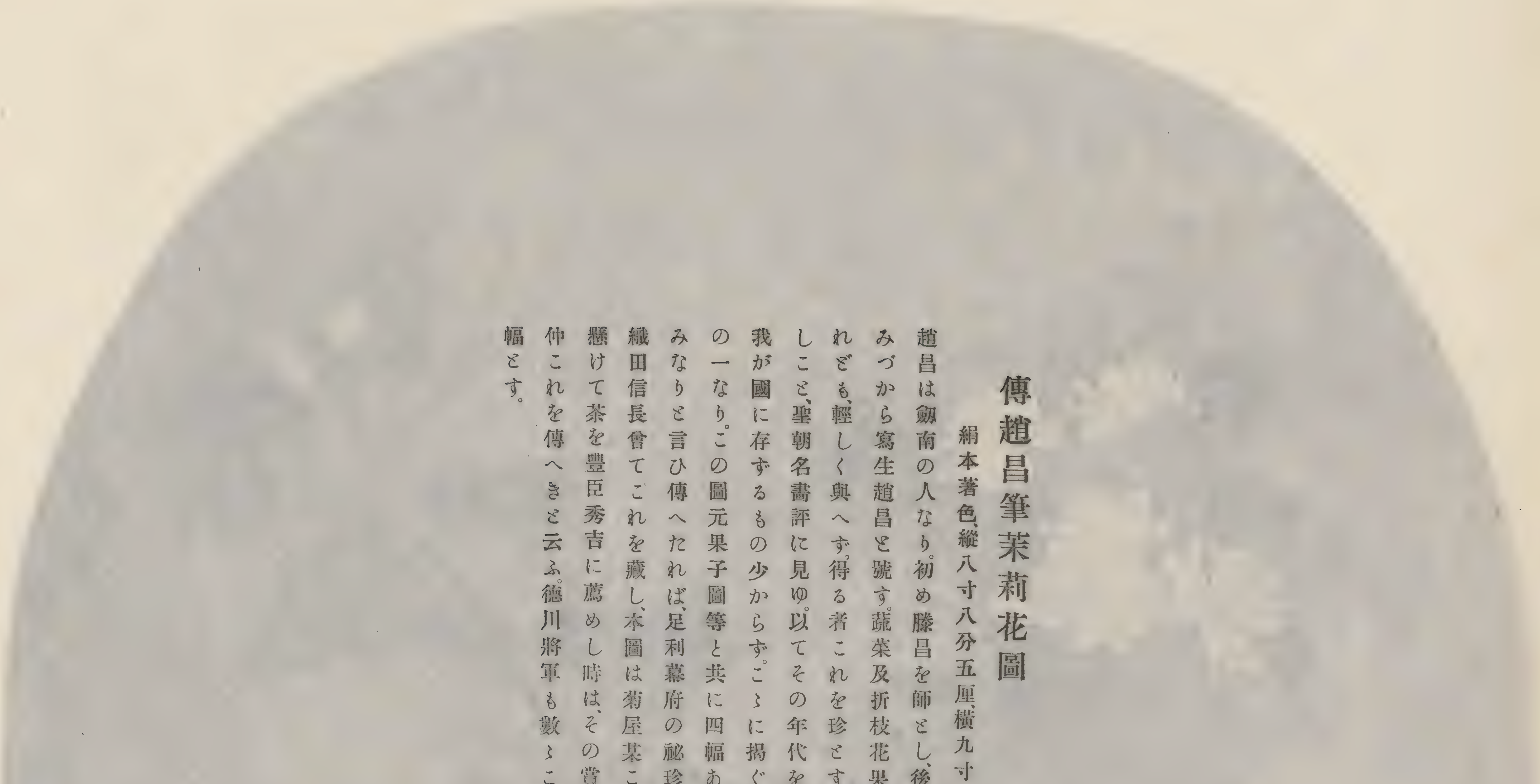
十六羅漢像

今迦理迦、羅怙羅二尊者圖を出す、絹本著色、各縱二尺九寸七分、橫一尺二寸

京都　清凉寺藏

この畫は、我が僧奝然が永延元年（太宗雍熙四年）宋より將來せるものなり。されば、五代乃至宋初の作たること、毫も疑を容れず。これを前出の禪月大師の畫及後出の李龍眠と稱する羅漢圖に較ぶるに、畫風の古調正にその間位に在り。配景の樹石も前出王吳の蹟と稱するものよりは、趣致較〻年代の降れるを想はしむ。衣褶の描法に肥瘦の妙味ある龍眠等の宋朝風は、早く既にその典型を成せるを認むべし。そも十六羅漢圖は唐末に始まりて、最も盛に宋代に行はれ、作者極めて多し。（梁李羅漢、後唐左禮、張南、蜀杜子瓌、杜齯龜、吳越王道求、宋錢易、王齊翰、顏博文、李時擇等）その蹟流傳して我が國に存ずるもの少からず。（後にも出づ）本品は即宋畫羅漢圖の最古きものなり。これを前後の諸品に比照して、以て畫風變遷の迹を考ふるに足れり。

第七尊者迦理迦



傳趙昌筆茉莉花圖

絹本著色、縱八寸八分五厘、横九寸

東京　赤星鐵馬君藏

趙昌は劍南の人なり。初め滕昌を師とし、後これに過ぐ。專ら寫生を勉めて花果に長じ、みづから寫生趙昌と號す。蔬菜及折枝花果善く眞に逼る。州伯郡牧爭ひて筆迹を求むれども、輕しく與へず、得る者これを珍とす。眞宗の大中祥符中丁朱崖の爲に畫を作りしこと、聖朝名畫評に見ゆ。以てその年代を知るべし。晩年蜀に還り、聲名益ゝ高し。畫蹟我が國に存ずるもの少からず。こゝに掲ぐる紈扇茉莉花圖の如きは、その尤なるものの一なり。この圖元果子圖等と共に四幅ありて、外題は相阿彌の筆、裝潢は義政公の好みなりと言ひ傳へたれば、足利幕府の祕珍にして、舶載甚古きを知るべし。餘の三幅は織田信長曾てこれを藏し、本圖は菊屋某これを三千五百貫に購ひ、菊屋正齋この幅を懸けて茶を豐臣秀吉に薦めし時は、その賞として五百石を賜ひしことあり。後菊屋道仲これを傳へきと云ふ。徳川將軍も數ゝこれを鑒賞せり。（本圖に附せる文書に詳なり）實に傳世の名幅とす。

傳李龍眠筆睡布袋圖

絹本著色、縦二尺一寸八分、横一尺六寸二分

伯爵　徳川達孝君藏

傳同筆阿羅漢圖二幅

絹本著色、各縦四尺二寸七分横一尺八寸三分

東京美術學校藏

傳同筆維摩詰圖

絹本水墨、縦二尺九寸六分、横一尺七寸

侯爵　黑田長成君藏

李龍眠、諱は公麟、字は伯時、龍眠居士はその號なり。舒州の人。進士に及第して中書門下と爲り、後刪定官に任せらる。哲宗の元符三年龍眠山に歸隱す。顧陸、張呉及前世諸名手の佳所を學び、衆善を集めて己の有と爲し、更に新意を加へて以て一家を成す。筆法雲行き水流るゝが如くにして起倒あり。李廌の畫品に曰く。「士大夫以謂、鞍馬愈於韓幹、佛像可進呉道玄、山水似李思訓、人物似韓滉、非過論也」。宣和畫譜に曰く。「尤工人物、能分別狀貌、使人望而知其廊廟館閣、山林草野、閭閻臧獲、臺輿皁隸、至於動作態度、顰伸俯仰、小大美惡、與夫東西南北之人、才分點畫、尊卑貴賤、咸有區別、非若世俗畫工、混爲一律」。宋朝第一品の神才たること、以て知るべきなり。遺作中、こゝに掲ぐる三品の如きは、即その尤にして、並に龍眠の妙技を觀るに足れり。この中、阿羅漢圖は元十六羅漢中の二幅にして、餘の十四幅の存否を詳にせず。殊に惜むべきなり。

傳趙大年筆秋汀行旅圖

絹本著色、縱八寸一分、橫九寸五分

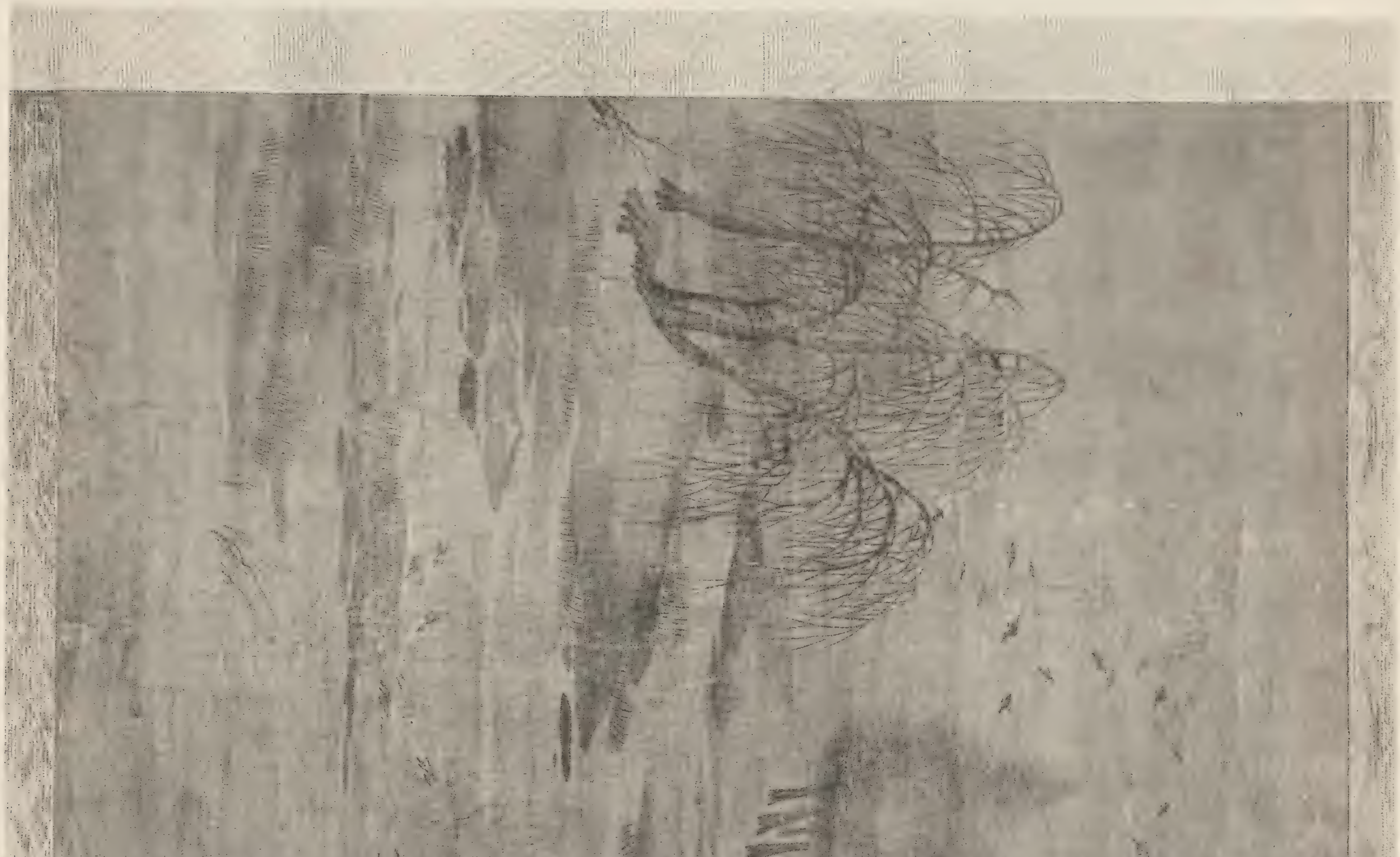
東京 赤星鐵馬君藏

傳同筆暮林群鴉圖

絹仝著色、縱七寸三分、橫八寸二分

橫濱 原富太郎君藏

趙令穰、字は大年、宋の宗室なり。官は光州防禦使に至り、歿して榮國公に追封せらる。美才高行あり。唐の畢宏、韋偃の蹟を師として、能くその眞を得たり。作る所小軸多くして、畫趣淸麗。雪景殊に王維に類し、汀渚水禽江湖の意あり。又東坡を學びて小山叢竹を寫す。殊に思致ありと稱せらる。こゝに揭ぐる所の二圖、善く畫傳の言ふ所に合へり。



傳徽宗皇帝筆溪松風雨圖　　甲斐　久遠寺藏

絹本著色、縱三尺九寸三分、橫一尺七寸五分

傳同筆秋山吟眸、雪徑曳筇圖雙幅　　京都　金地院藏

絹本著色、各縱四尺一寸八分、橫一尺八寸

徽宗皇帝天資文雅に富み、少より書を善くし、年未弱冠ならずして、盛譽夙に傳はりて人間に在り。萬機の暇、最古畫の鑒藏を樂み、珍蹟祕府に充物し、その數先朝に百倍す。その中、曹弗興より黄居宷に至る千五百件の名畫を集めて、一百帙十四門と爲し、名づけて宣和睿覽集と云ひ、又宣和畫譜を輯せしむ。最花鳥に長じ、翎毛の眼睛、點ずるに漆を以てし、隱然高出、殆活動せむとし、衆史能く及ぶ者なしと稱せらる。政和の初め、仙禽凡二十を寫し、題して筠莊縱鶴圖と云ひ、各その妙を極む。（畫繼）又水墨の竹石を善くし、焦墨緊細、一家の妙あり。（畫史會要）兼ねて山水に長せり。（畫繼）我が國流傳の御蹟、設色の花鳥、殊に畫鷹を多しとす。今その山水の名品を出す。元この三幅の外、更に一幅ありて、四季を爲せしものならむ。溪松風雨圖は、傳稱或は宋人胡直夫の筆と爲せれど、後の二幅と全く同筆なるべく、而も後者の傳説寧ろ信據すべきものゝ如し。二幅共に「盧氏家藏」の鑒藏印あり。又後の二幅には、足利義滿の「天山」の印あり。蓋し應永初年（明洪武末）の舶載に係り、室町幕府の御物たりしものとす。雪徑曳筇圖中の墨竹の如き、その畫法善く畫史會要の言へる所に合へり。三圖中、殊に秋山吟眸圖に至りては、裁構の奇逸、規模の雄大、頗不凡の作たるのみならず、擦皴の法、樹石の筆、并に南宋以前の格調たり。

龍門濘士筆米法山水圖

侯爵 黒田長成君藏

紙本淡彩、縱八寸二分、橫一尺九分

本圖はその款印に依りて、龍門の濘士の筆なることを知る。濘士の字、或は漫士と讀むべし。畫史この人を逸して、その傳を知ること能はず從ひてその年曆を考ふるに由なし。然れども款識の文中に見えたる伯時は、李龍眠にもやと想はれ、又筆墨の風趣、後出高然暉の畫等に比して頗る古調なるを以て、姑くこゝに編す。蓋し二米と前後して、而も畫風の同系統に屬せる一名手の蹟ならむ。

傳張思恭筆孔雀明王像　山城　仁和寺藏

絹本著色、縱五尺五寸七分、横三尺三寸七分

傳同筆不空金剛像　山城　高山寺藏

絹本著色、縱三尺九寸九分、横一尺九寸五分

張思恭の遺作と稱せらるゝ佛敎畫及人物像にして、我が國の古刹に藏せらるゝもの多し。何れも皆精緻巧麗を極む。然れども、思恭の傳記は支那の畫史全くこれを逸して、唯その名を我が國の古書君臺觀左右帳記（眞能文明八年錄、眞相永正八年錄の二本あり）に留めたるのみ。同書に依るに、宋南渡前の人（文明八年本には宋人とあり、永正八年本には南渡前とす）にして、設色の佛像及人物に長ぜりと云ふ。仍りて今北宋の末に附す。日東傳世の遺品中、こゝに掲ぐる二品の如きは、各ゝその尤なるものゝ一なり。描法の精緻、設色の巧麗、前出宋初及龍眠等の羅漢像に比するに、別に一家の特長たり。逸傳の妙手、名蹟を絶域に存ず。亦奇ならずや。

玄奘歸唐圖

絹本著色、縱四尺四寸四分、横一尺九寸八分

横濱　原富太郎君藏

宋畫とおぼしきものにして、作者の名を傳へざる名品、我が國に存ずるもの少からず。こゝにその一絕品を撰びて本圖を載す。その畫風北宋の李龍眠、張思恭等と相前後するものと鑒せらるゝが故に、今北宋遺作の末に編次す。描筆細巧にして而も起倒あること、宛も龍眠、思恭の間位に在りて、設色の精麗は更に二家を逾え、恪謹森嚴の調趣、多く見ざる所とす。

北宋の畫蹟、その妙品を擇びて、以上これを出せり以下、更に南宋の實繪を掲ぐ。

李廸筆雪中歸牧圖雙幅

絹本水墨、縱七寸九分、横七寸八分

東京　益田孝君藏

同筆牧羊圖

絹本著色、縱八寸七分、横九寸七分

同　赤星鐵馬君藏

同筆紅白木芙蓉圖雙幅

絹本著色、各縱八寸四分、横八寸五分

子爵　福岡孝弟君藏

李廸は河陽の人なり。徽宗の宣和中、畫院に入りて成忠郎を授けられ、南宋の紹興中再たび職に復して畫院副使と爲り、金帶を賜はる。最花鳥竹石に長じて、頗生意あり。又山水小景及犬を畫くに巧なりきと云ふ。その遺作、我が國に傳存せるもの、小幀最多し。蓋小品の畫は宋朝の一特色たり。明董其昌曰「宋以前人、都不作小幅、小幅自南京以後始盛」又畫中款識あるもの、南宋に至りて始めて漸く多きこと、亦これを李廸等以下の蹟に徵すべく、樹間石隙の款法、亦これを觀ることを得べし。沈灝畫塵曰「元以前多不用款、款或隱之石隙、恐書不精有傷畫局、後來書繪並工、附麗成觀」こゝに掲ぐる所、皆李廸遺作中の尤品にして、歸牧圖の筆墨、牧羊及木芙蓉圖の賦彩、並にその所長の妙技を觀る。殊に木芙蓉圖の款記に「慶元丁巳歲」とあるは、由りてその寧宗朝初尙世に在りし人なることを徵するに足れり。

傳蘇漢臣筆羅漢煎茶圖

伯爵田中光顯君藏

絹本著色、縱八寸三分、横八寸

蘇漢臣は開封の人にして、宣和畫院の待詔たり。劉宗古を師として道釋人物を工にし、最嬰孩に長ず。紹興中その官を復せられ、隆興の初、佛像を畫いて旨に稱ひ、承信郎に補せられき。本圖傳へてその遺作と稱す。巧整の畫風、一家の妙技を賞するに足れり。

馬公顯筆藥山李翺禪會圖

絹本著色、縦三尺七寸五分、横一尺五寸七分

京都　南禪寺藏

南宋畫院の名手馬氏一家の遺作は、我が國甚流傳に富む。馬公顯を初めとして、左にこれを列擧すべし。公顯は高宗紹興畫院の待詔にして、承務郎を授けられ、金帶を賜はる。父興祖の家法を傳へて、人物、山水、花鳥、皆これを善くせり。本圖はその落款ある一名品とす。蓋し馬氏一家の畫風は、興祖に創まり、その子公顯、公顯の弟世榮、世榮の子逵等相紹ぎ、更に逵の弟遠に至りて最その妙を極め、遠の子麟に至りて稍衰ふ。以下掲ぐる所を通覽して、以てその技風を詳にすべし。

傳馬遠筆林和靖愛梅圖

絹本淡彩縱三尺五分橫一尺三寸五分

男爵 岩崎小彌太君藏

傳同筆秋江孤舟圖

絹本淡彩縱一尺四分半橫一尺一寸六分半

東京 馬越恭平君藏

馬逵は馬公顯の弟世榮の子にして、馬遠の兄なり。家學の妙を傳へて、山水、人物花鳥等に兼ね長せり。殊に禽鳥は羽毛燦然として、生動の態、飛鳴の狀その眞に迫り、馬遠もこれに及ぶこと能はず。然れども、山水、人物に至りては、終にその弟に如かざりきと云ふ。こゝに出す所は、その遺作と傳稱せる中に於いて、最も秀でたるものなり。樹姿稍散漫の病ある外、次に揭ぐる馬逵の諸作に比して、多く遜らざる妙技を觀るべし。

馬遠筆風雨山水圖　　男爵 岩崎小彌太君藏
絹本淡彩、縱三尺六寸七分、橫一尺八寸三分

同筆松下高士圖　　伯爵 田中光顯君藏
絹本著色、縱三尺六寸七分橫二尺二寸九分

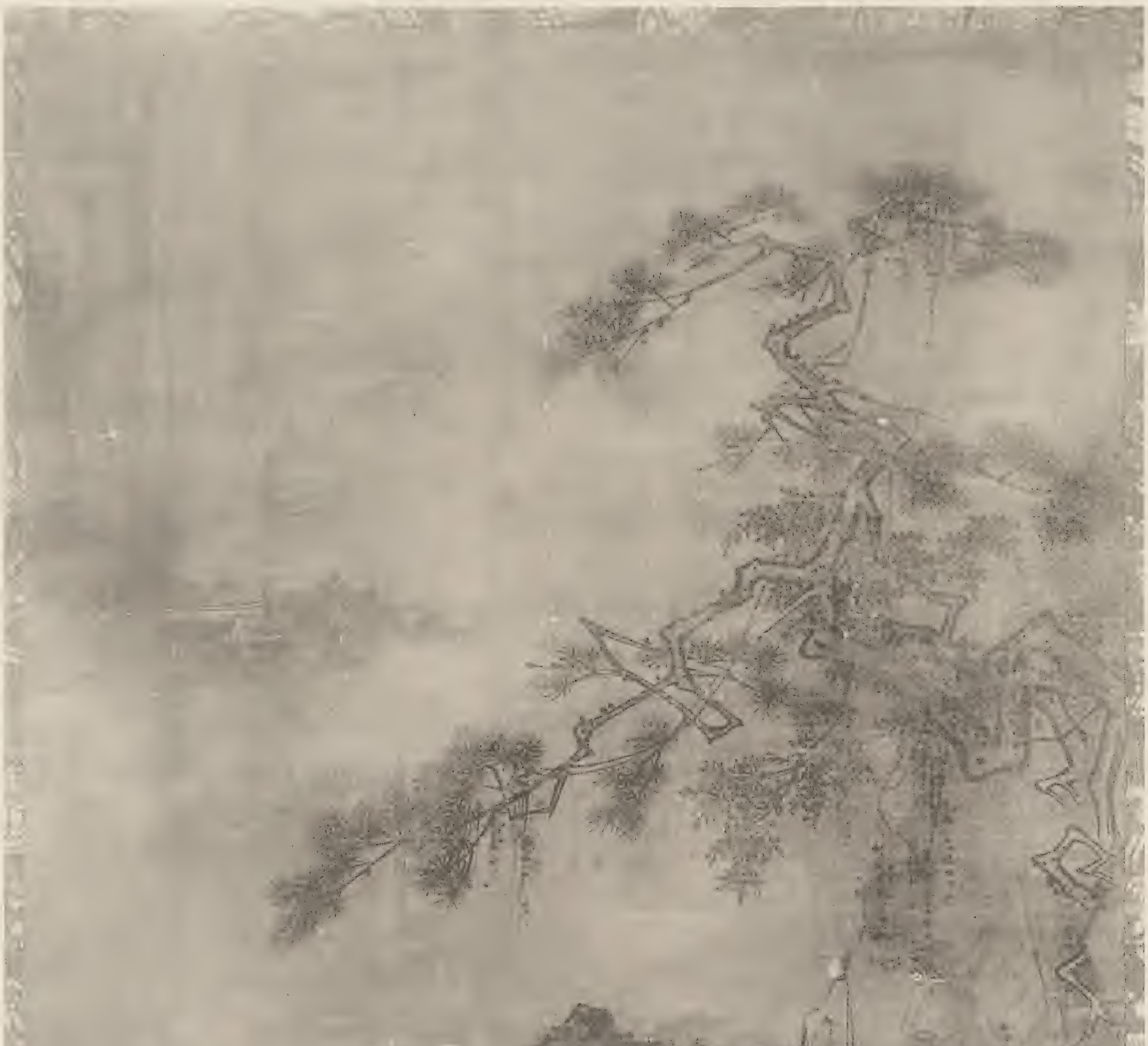
同筆松下觀月圖　　侯爵 黑田長成君藏
絹本淡彩、縱一尺九寸、橫八寸八分

同筆寒江獨釣圖　　伯爵 井上 馨君藏
絹本著色、縱八寸九分、橫一尺六寸六分

傳同筆松下展望圖　　東京 馬越恭平君藏
絹本淡彩、縱七寸九分、橫七寸二分

傳同筆雪窓吟思同　　伯爵 田中光顯君藏
絹本著色、縱三尺六寸七分、橫二尺二寸九分

馬遠字は欽山、馬逵の弟なり。山水、人物、花鳥等を書きて、皆妙に臻る。光宗、寧宗の朝、畫院の待詔たり。院中に獨歩すと稱せらる。馬氏數代の中、遠最も勝れ、一家の風格、實に斯の人に至りて大成せりと謂ふべし。故に後世宋畫を言ふ者、必指を遠に屈す。遺作我が國に存ずるもの頗る多し。何れも皆巨幅にして、筆墨の壯拔、規模の雄大、實にこれに過ぐるものあらず。落款あるもの少しと雖も、畫風皆同一にして、傳稱信を置くべく、鑒識上これを斷定するに足れり。明淸の論畫家多くは南宗を偏愛し、この種の畫を名づけて院體と云ひ、その裁構筆墨を評して、風骨奇峭、揮掃燥硬と貶し、甚しきは目するに狂態邪學を以てすと雖も、そは蓋し宋代の格調が朱明文弱の風尚に合はざると、その末流の明代に至りて浙派の粗獷に變じたるとの致す所にして、固より偏頗の癖見に過ぎず。雄壯卓拔の趣致、古今誰か能く馬遠等に及ぶ者ある。こゝに掲ぐる所の諸圖、皆馬遠の筆と傳稱せるものゝ尤品にして、並にその妙技を鑒賞するに堪へたり。



馬麟筆禪門機緣圖雙幅　東京　赤星鐵馬君藏

絹本淡彩

傳同筆普賢大士圖　京都　妙心寺藏

絹本著色、縱五尺二寸五分、横二尺六寸一分

馬麟は馬遠の子なり。能く家學を繼げりと雖も、その技父に及ばず。遠多くみづから書きて麟の名を款し、以てその作と爲して、これをして名譽を博せしめきと云ふ。然れども書院の祇候たりしより考ふれば、亦凡手に非ざりしならむ。その遺作傳世少からずこゝに載する所、前者は款識及某氏の古鑒藏印あり。後者は古來の寺傳、蓋し舶載當時よりの稱にして、信憑すべきものゝ如し。禪門機緣圖は命題を詳にせず。描法の筆致頗る卓落の妙あり。普賢大士圖は、戰筆の體、別に一種の趣を賞すべしとす、

陸仲仁筆江亭談古圖

伯林人類學博物館藏

絹本水墨、縱七寸八分橫八寸三分

陸仲仁は高郵の人。その傳詳ならず。僅に張表臣の珊瑚鉤詩話に、王右軍支道林許遠游三高圖を書き、以て晁以道に獻ぜしことの見ゆるのみ。本圖款識及「延之心賞」の藏印あり。その書風馬氏諸家及夏珪等とは稍異なれりと雖も、南宋の格調は復爭ふべからざるなり。

傳閻次平筆樹下牧牛圖

子爵秋元興朝君藏

絹本著色、縱三尺二寸、横一尺六寸八分

閻次平は宣和待詔閻仲の子にして、能く家學を傳へ、その技父に過ぎ、山水、人物及畫牛に長じ、その蹟李唐に髣髴たり。孝宗隆興の初め、畫を進めて旨に稱ひ、將仕郎を授けられ、畫院の祗候と爲り、金帶を賜はる。こゝに揭ぐる所の圖、以てその得意の畫牛に於ける技風を賞すべく、兼ねて李唐に似たりと稱せらるゝ樹法等を觀るべし。

傳毛益筆萱草狗兒圖

子爵　福岡孝弟君藏

絹本著色、縦八寸四分、横八寸五分

毛益は崑山の人、毛松の子にして、孝宗乾道中、畵院の待詔たり。最も翎毛花卉に長じ、渲染を巧にして、畵く所の禽鳥飛鳴せんとすと稱せらる。南宋の動物畵家中、後世最も名高く、その蹟我が國に流傳せるもの少からず。こゝに掲ぐる圖の如きはその佳作にして、以て毛益の技風を觀るに足れり。

林庭珪及周季常筆五百羅漢圖

絹本著色、各縱三尺六寸九分、橫一尺七寸七分

京都　大德寺藏

我が國傳ふる所の宋畫に、林庭珪、周季常二家の筆に成れる五百羅漢圖百幅あり。その中十八幅は後世の補筆に係る。こゝに林庭珪筆二圖、周季常筆一圖を掲ぐ。この二家は支那の畫史全くこれを逸して、その名をだに傳へずと雖も、この畫に僧義熙の金字の題記ありて「戊戌淳熙五年」の作なることを知るべく、又「林庭珪筆」及「周季常筆」の款識あるによりて、二家の南宋孝宗頃の人なりしを知ることを得べし。これを細觀するに、二家の技風略相似たりと雖も、林の筆致は頗る勁鋭、周の描法は較〻婉曲の異調あり。設色の巧麗は兩者相如く。蓋し二家共に院外の妙手なり。

香象大師像

絹本著色、縱五尺五寸、横二尺七寸

奈良　東大寺藏

この畫作者を詳にせずと雖も、畫上題記の末に「大定乙巳秋月中三日」とあるを以て、孝宗淳熙十二年、金に於いて畫かれしものなることを知る。畫法頗る古調にして、唐畫の遺風に屬せるは、蓋し北地の作にして而も古式を重ずる佛敎畫たるが爲か。

傳劉松年筆宮女刺繡圖

侯爵　黒田長成君藏

絹本著色、縱八寸一分橫八寸五分

劉松年は錢塘の人なり。光宗紹熙書院の學生たり。人物、山水を工にし、神氣精妙、その師張敦禮に過ぎ、院人中の絕品と稱せらる。寧宗の朝、畊織圖を進めて旨に稱ひ、金帶を賜はる。李唐及劉松年等の畫は、同じく南宋院人の中、馬遠、夏珪等の水墨の勁拔とはその調を異にせしものゝ如し。本圖以てこれを徵するに足る。

夏珪筆風雨山水圖　　神戸　川崎正藏君藏

紙本水墨

同筆江頭泊舟圖　　男爵　岩崎小彌太君藏

絹本水墨、縦七寸六分、横一尺一寸四分

同筆山水亭榭圖　　侯爵　黑田長成君藏

絹本水墨、縦八寸五分、横一尺一寸三分

同筆觀瀑及聽泉圖雙幅　　東京　赤星鐵馬君藏

絹本水墨、各縦八寸三分、横八寸六分

同筆江城圖　　東京　下條正雄君藏

紙本水墨、縦一尺四寸五分、横一尺九寸七分

傳同筆水鷗圖　　侯爵　黑田長成君藏

絹本水墨、縦八寸七分、横九寸一分

傳同筆山水圖雙幅　　伯爵　前田利同君藏

絹本淡彩、縦五尺五寸六分、横二尺五寸三分

夏珪字は禹玉、錢塘の人なり。寧宗の朝、畫院待詔と爲り、金帶を賜はる。その人物畫は筆法蒼老、墨色淋漓、雪景は全く范寛を學び、山水の妙、李唐以下院中の人その右に出づる者なしと稱せらる。遺作の流傳我が國に多きこと、馬遠に讓らず。間〻款識夏圭あるものありて、馬氏の壯跋なる禿筆と異なりたる雋鋭の筆致、盡くその揆を一にせるを以て、對較鑒識以てその眞蹟と定むることを得べし。こゝに揭ぐる所の諸圖皆然りとす。馬遠の作の巨幅を專らとするに似ずして、夏珪の畫蹟は、横卷の斷片若くは小幀を多しとす。蓋し玩賞上形式の變遷に由るならむ。後世南宋の院畫を論ずる者、馬遠、夏珪を並稱して、以て雙絕の大家と爲す。これ等の遺作を觀て、盛名の下虛士なきことを知るに堪へたり。これ等の中、多くは款識あり。風雨山水圖には「雜華室印」の藏印あり。江城圖は横卷の斷片ならむ。水鷗圖には足利義滿の「天山」の藏印あり。最後の山水双幅は、畫風頗る馬遠に類せるを認む。

明治四十三年二月二十日印刷
明治四十三年二月二十五日發行

（東洋美術大觀第八冊奧附）

不許複製

編輯兼發行者　東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社審美書院代表者　田島志一

寫眞版印刷者　東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社審美書院寫眞版部主任　中山音次郎

木版印刷者　東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社審美書院木版部第一工場主任　三井藤三郎

活版印刷者　東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社審美書院活版部主任　神田輝夫

印刷兼發行所　東京市京橋區新肴町十三番地
株式會社審美書院
電話新橋三〇五五番
新橋三五三九番

明治四十三年二月二十日印刷
明治四十三年二月二十五日發行

（東洋美術大觀第八冊奥附）

不許複製

書籍審美

發行所兼印刷所 東京市京橋區新肴町十三番地 株式會社 審美書院 電話新橋三五〇 三五八五番

活版印刷者 神田順夫
株式會社審美書院活版部主任
東京市京橋區新肴町十三番地

木版印刷者 三井藤三郎
株式會社審美書院木版部第一工場主任
東京市京橋區新肴町十三番地

寫眞版印刷者 中山音次郎
株式會社審美書院寫眞版部主任
東京市京橋區新肴町十三番地

編輯兼發行者 田島志一
株式會社審美書院代表者
東京市京橋區新肴町十三番地

SMITHSONIAN INSTITUTION LIBRARIES
3 9088 01652 2575